

歯 科 健 康 診 査

動 向

平成17年度における歯科健康診査は、15団体13,817名の受診であった。

顧客団体独自方式を除く、診査結果の内訳をみると「健康」である者が全体の約28%、「要注意・要治療」が全体の約72%となっている。また「要注意・要治療」の中では、歯石・歯垢の除去がその大半を占めている。この傾向は例年とほぼ同様となっている。

当協会が実施する歯科健康診査の目的は、予防歯科を目指すものであり、この観点からすると歯石・歯垢の除去を指示される方が例年多いというのは問題とされる。

受診者への結果報告の戻し方、教育的見地に立った結果説明など健診機関としてのもう一步踏み込んだ対応と実施団体との連携が重要と思える。そのためにも実績に基づく評価、健診の持つ役割などをまとめ、根拠に裏付けられた歯科健康診査を提唱していく必要がある。

方 法

口腔内の状態を一単位として、健康者、要注意者、要治療者の三段階に評価する、ふるいわけ健診を行っている。歯科医師による口腔内診査、問診票による回答と唾液潜血反応検査の結果から判定する。診査時間が1分前後で終わるので待ち時間が短い利点がある。唾液潜血反応検査は、歯肉からの出血の有無をみるもので、－、＋、++の三段階で判定し、口腔内診査は「歯」「歯列・咬合・顎関節」「歯肉」「生えかわり」の四項目に、それぞれ「普通」「要注意」「要治療」の三段階で判定し、総合評価を決定する。診査後、必要に応じて歯科医師による歯科保健指導がその場で行われ、各受診者に結果通知書をわたしている。

結 果

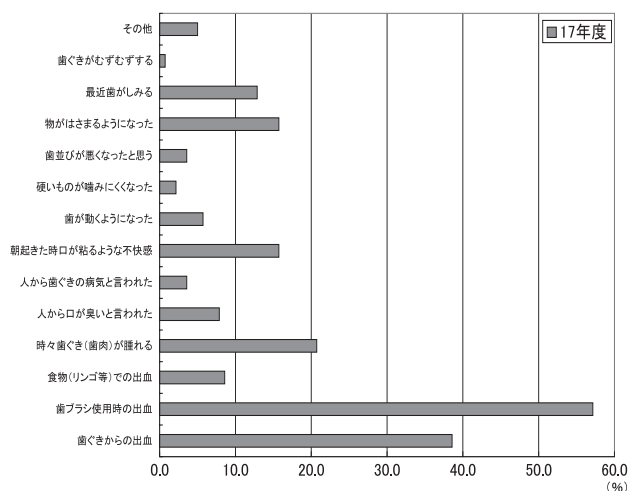
平成17年度の受診者総数は、表1に示されるように15団体13,817名となっているが、前述の方法による受診者総数は8,079名（男性6,835名、女性1,244名）である。診査結果の概評を総体的にみると、健康者（総健康者を含む）は2,298名（28.4%）、要注意者2,703名（33.5%）、要治療者3,078名（38.1%）となっている（表2）。性別でみると、健康者は男性の

26.5%に対し、女性は39.0%となり12.5%を上回っている。これを年代別（50歳以上をはぶく）でみると各年代とも女性の方が高い割合を占め、とくに29歳以下の群では40.2%を示し、男性の同群と比較すると13.1%を上回っている。要治療者についても女性の方が各年代とも少ない割合を占め、その性差は各年代で約10%となっている。

表3は、要注意・要治療者をみたもので、総体的には「齲蝕の治療」24.7%、「歯周疾患の治療」8.4%を占め、両者の発病と関わりが深い「歯垢・歯石の除去」が53.1%を示した。最も高率を占めた「歯垢・歯石の除去」を性別でみると、男性の55.9%に対し、女性は37.9%と18%も低い割合を示していた。年代別では、40歳代で男性・女性とも56%と高いことから、前述した年代別要治療者の割合とを考慮すると、30～40歳代は職域においては歯科治療にかかりにくい年代層と推察される。

職域では、齲蝕対策より歯周疾患に対する対策の方が重要であろう。本健診は、問診と唾液の潜血反応検査を行っているが、+以上の人について問診項目との関わりを示したのが図1である。問診項目における頻度分布は、毎年ほぼ同じような傾向をあらわしている。従って、「歯ブラシ使用時の出血」「歯肉からの出血」「時々歯肉がはれる」の三項目の自覚症状があれば、速やかに歯周疾患の治療を受けましょう。歯周疾患による歯の喪失を防ぐことにより、自分の歯で生涯豊かな食生活が送れるよう努力したいものである。

図1 唾液潜血（+）以上の者と問診との関わり



関係の集計表は110頁に掲載